
近世ヨーロッパの皮革 1. 皮革産業

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめに

ヨーロッパでは近代への過渡期にあたる15世紀末から18世紀中頃までを近世と呼ぶ。15世紀から16世紀にかけて、富裕な商人層を担い手とした新しい文化の創造であるイタリアのルネサンス、イベリア半島におけるキリスト教諸国の建国やアメリカ大陸発見などのヨーロッパ勢力の拡大、中世の教会中心に対する聖書中心の宗教改革などによって近代への道が切り開かれた。中世都市に手工業者の職種ごとの仲間団体あるいは同業組合すなわちギルド（ドイツでは地域によりツunftあるいはインヌングと呼ぶ）が形成され、権益の確保がなされた。ドイツのアウクスブルクのようにツunft出身者が市政に関与するようなこともあった。16世紀に入り、技術の進歩と機械化により生産が増大し、皮革産業では鞣製技術や機械化が17世紀後半以降著しく進歩した。スペインにおける宗教的な抑圧が職人の移動をもたらし、それによりモロッコやヨーロッパの各地で上質の革が生産され、名声を博し、世界に知られるようになった。

2. 皮革産業

16世紀のフランスにおいては、フランス・ルネサンスと宗教改革の影響で、手工業者を中心に改革派教会（ユグノー派）が形成されていった。激しい宗教争乱が30年も続

き、1598年にアンリ（ヘンリー）4世がナントの勅令を発して、新教徒に信仰の自由と市民権を認めた。17世紀のフランスにおける皮革業者はインヌングによって自ら製造法を定め、上質の革を製造し、その品質の保持に努めていた。パリでは皮革産業が盛んであったが、それに続いて発展した都市はシャテルロー（皮革の首都と称せられた）、ポアティエ、ニオール等である¹⁾。種々の革製品の製造と消費拡大により、国内原皮は不足を来し、さらにアジアやアフリカからの輸入も十分でなく、原皮の配給制が導入された。しかしながらルイ14世による1685年のナントの勅令の廃止以降、皮革産業は衰退した。これは皮革産業に従事する多数のユグノー（宗教改革派の民衆）が国外に亡命したためであり、熟練職人らの亡命は皮革産業のみならず、すべての産業の発展に大打撃となった。しかしその後18世紀に入り復活した。亡命者は主にドイツ、スイス、オランダ、イギリス等に移住した。12世紀にはパリに市場が設立され発展し、その中に皮革市場（Hall aux cuirs）もでき、これがブルゴーニュ役場に移動する1784年まで約600年続いた。皮革は共同市場での他に年5回開催される競売でのみ販売することが出来た²⁾。13世紀のパリの皮革市場の絵画では、屋台のような店で革が販売されている様子が描かれているが、イギリスの1800年頃の皮革市場の銅版画には、多量

の鞣された一枚革あるいは半裁革が荷馬車
で運搬されている様子やかなり大きな建物
の中に多量の革が積まれている様子が描か
れている^{1, 3)}。市場で販売される革はギル
ドによって品質が管理されていた。もし規
格外の製品があれば、罰金や廃棄が科せら
れた。ドイツでも製革業者のツンフトは権
力を有し、評判を落とすような違反行為に
は作業場の閉鎖や道具の没収などで厳しく
罰した。製品革はツンフトの代表によって
品質検査が行われ販売された。多くの地方
では、公設市場でのみ販売された。スイス
のベルンでは、1666年の定款に、前もつて
検査官によって良好と示されないと、販売
あるいは客に引き渡さないという規定があ
った。ベルギーでは、製革業者や製靴業
者は独自の印章を押して品質を保証して
いた。フランスでは、インヌングの規則が時
代の経過に伴って変化し、1791年に国の機
関が職業選択の自由を決め、インヌングは
最終的に解散した¹⁾。

イギリスではエリザベス1世(1533～
1603)の統治下で、商人の組合が革販売
会社(Leatherseller's Company)を設立した。
これがしだいに皮革生産を管理するよう
になった。2、3の製革業者が品質の悪い製
品を生産したので、女王はイギリスで生産
された革のすべての販売に対して、エド
ワード・ダルシーに特権を与えた¹⁾。この
処置に会社が反対したので、指導者が投獄
され、1,000ポンドの罰金を払わされた。
しかしこの命令は後に取り消され、この会
社はイギリスにおける上質のモロッコ革や
ペロア革の製造に寄与した。これらの革は
プロバンス(フランス南東部)のスマック
と明礬で鞣された。18世紀においては、イ
ギリスの革は世界一と言われ、輸出されて
いた。鞣し法においても進んでおり、鞣し
液の濃度を徐々に高めるいわゆる

「Versenken, handlers どぶ漬け」法が開
発された⁴⁾。

ヨーロッパにおいて、手工業の職人は組
合(ギルド、ツンフト)を結成し、自己の
権益を守ると同時に職業に対する誇りを持
ち、規約を作って自己規制していた。しか
し祭りともなると組合ごとに規約や現金等
重要なものを保管した櫃や旗を先頭に行列
して祝った。ドイツのロストクでは、製革
業者が聖霊降臨会や射的会などの祝日に、
楽隊や旗手を伴って行進を行い、さらに宴
会を催した。宴会用のビールは不良品を生
産した罰金でまかなわれ、多くの場合、市
長がその2倍のビールを提供しなければなら
なかった⁵⁾。1595年の記録では、集めら
れたビールの量が12トンを下らなかったと
ある。謝肉祭のような祝祭には、特別の錫
製の杯やガラス製のグラスが用いられた。
図1の杯は錫(一部は鉛を含有)製であり、
1583の刻銘のある中央の大きなものは
Willekomm(歓迎の杯)と称せられ、新
しい仲間を歓迎するために用いられたので
あろう⁵⁾。前面の小さな杯には鞣し工の絵
が描かれており、両側の杯(高さ約
50cm)には蓋の上に旗を持った騎士像が



図1 製革・製靴業組合の金属杯

ある。この像はドイツ騎士団の戦闘（1370年）に貢献した靴屋を顕彰しており、左側のものには組合員の名前が記された銀製の札が12枚掛けてある^{5、6}。またガラス製のグラスには、選帝侯の肖像画や職人の道具、ツunftの紋章（ワッペン）等が描かれ、「植物タンニン鞣し工 Anno 1755」などと銘刻されているものもある。ロストックの博物館に収蔵されている製革業者の紋章は銀製の長さ32cmで、高さ26cmの大きさであり、その構図は肉片や脂肪、毛等の除去用の銚刀（フレッシングナイフ）と厚さを調整する仕上げ刀（キャリアーズナイフ）を交差させ、それを2匹のライオンと王冠で



図2 製革業組合の紋章



図3 製靴業組合の紋章

囲ってある（図2）⁵。製靴業者の紋章は双頭の鷲の胸部に革切断用の半月形小刀が描かれている（図3）⁶。ドイツの靴博物館には、靴屋と鞣し工の合同組合の彩色された板ガラス（42×31cm、1568年製）があり、それには中央部に2匹の黄金のライオンと市の紋章と共に靴屋と鞣し工の道具を模った紋章が描かれている（図4）⁶。上部の仕事場の図は1568年にフランクフルトで発刊された「西洋職人づくし」の靴屋と鞣し工の木版画に由来する。百獣の王あるいは勇猛な鳥と言われるライオンや鷲が皇帝や国王、帝国の紋章として用いられており、同様の紋章が製革・製靴業者に使用されていることは、当時の彼らの誇りや社会的地位を象徴している。これらの紋章の図案は看板や印章などにも用いられた。

ドイツの産業は30年戦争（新旧両教徒の宗教戦争 1618～1648）まではかなり繁栄



図4 製革・製靴業組合のガラス板

していたが、その後衰退した。人口が1700万から400万に減少し、家畜頭数も80%に減少した。皮革産業も他の産業と同様に衰退し、ベルリンでは唯一つの工場しか操業していなかった¹⁾。しかし前述のユグノーの避難民がフランスから多数移動してきてからは再び栄え、18世紀後半には、南米から牛皮を輸入するほどになった。1700年の統計では、フランスからの移住者の皮革工場と商店はベルリンでは18、ブランデンブルクでは42であった。皮革産業が発展した主な都市はエルランゲン、ハルバースタット、バイロイト、ハレ、マクデブルク等であり、これらは君主によって保護されていた。

スペインのコルドバは中世には皮革製造の中心地であり、コルドバ革やガダメシ革が世界的に有名であった。コルドバのほかにはグラナダ、セビーリャ、バレンシアでも製造された。しかし1609年のフェリペ3世によるモリスコ追放令により、モリスコすなわちキリスト教徒の地に留まったイスラム教徒のムーア人への迫害と追放により、多くの皮革関連の職人も対岸の北アフリカや他のヨーロッパ諸国に移動してしまい、皮革産業は衰退した。スペインを逃れたモリスコは総計約300万人に達したと言われ、その中には有能な職人や農民も多くいたので、スペインの産業は全てにわたり衰退した。没落後のスペインの製革技術はモロッコやヨーロッパ特にイタリアやフランスに移った。イタリアでは、ローマ、ヴェニス、ナポリ、ミラノ、フローレンス、シエナ、フェラーラ、マントゥア等が皮革の主要都市であった。アフリカや黒海沿岸から原皮と毛皮を輸入し、製品をアフリカやフランス、ドイツ、イリリア（ユーゴスラビアおよびアルバニア地方の旧名）、ルーマニアに輸出していた⁴⁾。

3. 鞣剤の開発

16～17世紀に製鉄業が発展し、高炉への送風用の大きな革製鞴や労働者の作業用の革製前掛けなどの需要が高まった。しかし高炉の燃料として木炭の需要も高まり、建築業や造船業の木材需要の増大とも重なって森林資源の衰退を来した。ライン河畔では、豊富な樹木と水に恵まれ、皮革産業が発展していたが、鞣し剤の原料となる木材の枯渇は大きな問題となった⁴⁾。この森林資源の枯渇は他の国でも同様であった。ゲティンゲン（ドイツ中部）の王立の機関が太古の時代から鞣し剤として利用されていたオークなどの樹皮の代替物を調査した。えにしだ、きじむしろ、ひれはり草の根、白樺やフィッテ（ドイツ唐桧）、なまかまどの灌木、タンネ（もみ）、はんのき、スマック等が挙げられた。

没食子や樹皮等は古くから皮鞣しに利用されていたが、それらの成分に関するタンニンの研究は1770年に始まり、当時没食子酸とタンニンの区別はされていなく、1787年にScheeleが没食子酸を発酵した没食子エキスから発見した⁷⁾。しかし分離された物質は単一ではなく、没食子酸、緑色物質、ロジン（タンニン？）および抽出性物質の混合物であった。Proustが結晶性の没食子酸と非結晶性の収斂性物質を区別して、後者をタンニンと称した。1800年頃から、種々の植物タンニン剤に関する研究がなされている⁸⁾。1800年頃、PfeiferやKrunitz、Seguinは石炭と泥炭、泥炭地から合成鞣剤を製造した。しかし合成鞣剤（シントアン）の実用化は遅れて20世紀になる。

18世紀後半に、明礬以外の金属鞣しの研究がなされた^{4)、9)}。Johnsonは1770年に緑礬（硫酸鉄）と塩酸または硝酸を用いた植物タンニンとのコンビネーション（複合）鞣しの特許を得た。Bautschは1793年に緑

礬で鞣し、次いで一般的な鞣剤で再鞣した。Ashtonは1794年に酸化鉄と緑礬を使用した。しかしながら鉄鞣しは鉄塩が不安定であり、さらに浸透した鉄塩が中和の段階で結合しないで溶出しやすく、製品革が硬く脆いという性質があることで、実用化はあまり進まなかった。現在主要な鞣し剤であるクロムの鞣皮性に関する研究と実用化はかなり遅れて19世紀後半である。

4. まとめ

中世においてコルドバ革の生産地であったスペインは16、17世紀に宗教的な見地からその製造技術を持つ有能な職人を追放した。その多くは対岸の北西アフリカやヨーロッパ各地特にイタリアやフランスに移動し、その地で皮革産業を発展させた。製革業や製靴業の職人組合は自己の職業に誇りを持ち、組合の紋章にライオンや鷲の図を取り入れた。

16、17世紀には、製鉄業や造船業、建設業が発展し、木材の需要が増大し、製革業における鞣剤の不足を来し、オーク樹皮に代わる鞣剤が探索され、さらに金属鞣剤の開発が試みられた。

文 献

- 1) Bravo, G. A. : "100000 Jahre Leder Eine Monographie", Birkhauser Verlag, Basel und Stuttgart (1970) P. 223.
- 2) ジャック・プルースト監修・解説："フランス百科全書絵引", 11 皮革技術 Peau, 平凡社 (1985) P. 627.
- 3) サンケイ新聞大阪本社："ヨーロッパ革工芸美術展", (1986) P. 149.
- 4) Korner, T. : "Handbuch der Gerbereichemie und Lederfabrikation" I -1, (Grassman, W., Hg) , Springer-Verlag, Wein (1944) P. 1.
- 5) Kobert, R. : "Beitrager zur Geschichte des

Gerbens und der Adstringentien", Verlag von F.C.W.Vogel, Leipzig (1917) P. 42.

- 6) Deutsches Ledermuseum : "Deutsches Ledermuseum angeschlossen Deutsches Schuhmuseum", Graphische Werkstatt, Offenbach (1956) Nr. 3910, 3950, 3951, 3960, Einbanddecke.
- 7) Grasser, G.: "Synthetic Tannins", The Technical Press Ltd., London (1922) P. 9.
- 8) Grassmann, W., Hg: "Handbuch der Gerbereichemie und Lederfabrikation" IV, Springer-Verlag, Wein (1960) P. 214.
- 9) 久保田穰：無機なめし－主として鉄およびアルミニウムなめしについて，皮革科学, 20, 1 (1974) .